

# TAKI no TAWAGOTO

【最新デジタル一眼と

中古レンズとの奇妙なコラボレーション】

デジタル一眼レフカメラといえば以前は高価の花でしたが、最近では価格もこなれてきて、入門機のレンズ付きで5～6万程度になってきました。自分もいつかは手に入れたいと思ってきましたが、小遣いを少なからずつぎ込んで集めたフィルムカメラレンズへの思い入れが強いことと、デジカメの作る画像が今一つ味気無く感じる事がデジタル一眼の購入を踏み止めていました。ところが昨年PENTAXからK100Dという入門機が発売されてから、すこし風変りなデジタル一眼の使い方が広まってきました。カメラボディはデジカメで、それに往年の中古レンズを装着し撮影を楽しむ人が増えはじめたのです。PENTAXというカメラメーカーは40年程前に世界初の一眼レフを造ったメーカーです。その際採用されていたレンズのマウント方式（カメラのボディとレンズをくっつける方式）がM42マウントという世界中で最も多く生産されたマウント方式だった為、膨大な種類のM42マウントのレンズが世界中に今も存在します（ただしほとんどが中古で）。今、中古レンズ市場ではこのM42マウントのレンズの人気がうなぎ登りとなっています。30年以上前の中古レンズなのにネットオークション等で2から3倍にも高騰するものや、「30年以上も前のレンズなのに、最新のズームレンズに負けない味のある写りをする。」という声が出す様に、若い人にとっても、往年の中古レンズの写りは新鮮に感じられるのでしょう。また、このK100Dという機種はレンズの焦点距離を予め入力しておく、マニュアルでピントを合わせた時にピントが合った箇所を知らせてくれる機能が付加されています。こんな

PENTAXというメーカーの過去の資産に対する真面目な姿勢が評価されたのかも知れません。どうですか？あなたも最新デジカメに中古レンズ、試したくなってきましたか？（カメラボディ：PENTAX K100D）+（レンズ：Carl Zeiss Jena フレクトゴン20mm:東独製）



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2008/05  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167  
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217  
Fax 076-233-7375  
Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)



2008/05  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

## 泉 月



by hama

## 寄稿『出会えたからこそ・・・』

株式会社ラス・コーポレーション 太田 聖子

「縁や出会いで沢山の方達に支えられ、お力をお借りして、昨年十月に株式会社RASコーポレーションが立ち上がりました。

ロコクリ（シズオカ・ローカル・クリエイション）。携帯電話でのメール一斉配信機能と携帯電話でのホームページ作成機能をセットにそのサービスを提供しているのがロコクリです。

それはある日、一通の友人から携帯電話に届いたメールがきっかけでした。

「今、本川根ではホテルが飛び始めました。」こんな短いメールですが、友人は地元を離れた人達にも、地元の情報を送っているとのこと。

中川根が地元じゃないけど、こんな素敵なメールがきたら見に行きたくなっちゃいます。

時々、地域活性化という言葉を聞くと、何をどうすればいいのかわからないって思うところがあったけど、もしかしたら、その住む人達がまだ知らない地元の事を知り、知る事で気にする、そして好きになり、その住む人達が元気になっていく、これが地域活性の基になるのかなあ。

ロコクリがそんなところで、お役に立てたらいいなあ。

ロコクリのサービスを始めたことを、色んな人の知ってもらいたいとの半年、今まで会うことはなかったような人や、普段の生活では会わないで済んでしまうような人や、本当に沢山の方達に会って、お話をさせていただいたり、色んな事を聞かせていただいたり、そこからまた次に繋げていただいたり、出会いの楽しさを感じたりもしています。

そんな時に、こんなお話をしてくれた方がいました。「一生のうちで出会える人の数は何人くらいだと思いますか？一日に十人の人と握手をして、一年で三千六百五十人。日本の人口が約一億二千万人、すると全員と握手するのに約三万年かかるんですよ。

一生の内に絶対出会えない人がいるんです。」  
出会えたことでももしかしたらすごいことなのかもしれない！

出会えた縁に感謝し、その縁を次に繋げていかなないと！です。



【プロフィール】

（おたせいこ）

1961年遠州横須賀生まれ。

株式会社ラス・コーポレーション

専務取締役。携帯コンテンツ・企画・製作・販売

<http://www.ras2007.co.jp>

## 濱のいざなわ 『ロコクリの足音』

平日は単身赴任をしている。夜まで仕事、その後家事となる。ほんやり過ごす時間が好きだが、中々取れない。週末約1時間かけて家族の住む能登に帰る。車を運転しながらではあるが、この時間が結構大切なひと時となっている。

数年前だったと思う。そんな運転途中でフト自分の心が硬く小さくなっていくことに気づいた。何をそんなに頑なになっているのだろう。何に怯えているのだろう。どうすれば、柔らかく暖かな心に戻れるのだろう…。しかしいつしかそれも平生の忙しさにかき消されてしまっていた。

最近耳にしたお話。「心も「ル」ごとがある」  
実感を持っていたからすべにあのときの状態でピンと来た。人間の心とは本来、柔らかく伸びやかで、暖かいものだそうである。それが人とのさまざまに関わりの中で「コッてしまっ」ことがある。一番の解消法は、人の話を良く聴いてくれる人と話をすること。ところが、現代は俄か評論家が蔓延している。人の話を聴く振りをして自分の価値観に照らし、評価・論評をしようとする輩が多い。これをやられると余計に心がコッてしまうという。心が小さく固まってしまふと人間は生きてゆけならしい。自殺者が交通事故死者の3倍を超え急増しているのは、このためか。思えば自分も家族を始め、相手の話を聞く振りを

して心を「コッてしまっ」ように心を繰り返してきたような気がする。恐ろしいことだ。「コンサルタント」という仕事は、顧客の課題に改善提案をするものであるが、時に「自分がやりたい事を顧客に代わりにさせる」ということになってまいいか、深く省み続ける必要がありそうだ。人間は自分勝手な生き物である。本当に相手の身になるということは、本性と背反するから難しい。が、難しいものであるからこそ、成せるならばプロとなる。

心に関してもう一話。「心は「ロコ」と移る」もの」十年以上禅寺に通ってきた。取りも直さず、相手が難しい我が心に克ち悟りを得るために他ならない。ところが話者はかく下す。悟りとは永遠に心が安静な状態にあることではないと。心が完全に動かなくなれば、それは死んでいるのと同じ。心の本性は「ロコ」と移るものなのであることを知って、一々浮かぶ想念に囚われず流してゆくと。どうやらこれができるようになることを言うらしい。

禅語にも「今此処を生きよ」という。目の前のことをやらず「過ぎたことを悔やみ、起きてもないことをあてもない。こつでもない」と思い煩う人の心を諭したものであろう。

心の「コリ」が解れしなやかになれば、生き生きとし、他人も思いやれる状態になる。囚われず流すことができるとしよう。

モチベーションというものは、そもそも人によってその全体量に差があるのだろうか？ ここで言うモチベーションとは、即ちやる気のことである。要するに、やる気というものは、人によっては多い少ないの差はあるのだろうか？ということである。

自分の周囲を見渡せば、やる気満々の人もいれば、やる気なしに見える人もいる。とすれば、普通に考えれば、その量の差は当然あるように思える。やる気をコップと水に例えると下記のようなになる。

とは言え、自分自身を振り返れば、やる気満々の時もあれば、やってられっか・・・やる気なし！ってな時もある。即ち、モチベーション、やる気というものは、時と場合によって移ろいやすいものなのである。



やる気満々



やる気なし

とするなら、「そもそも人それぞれのモチベーションの総量は同じだが、あることが原因となり、モチベーションが出やすくなる場合と、出にくくなる場合がある。」という仮説を立てることができるはずだ。

モチベーションが出にくくなっていく人には、何かが障害となっている。これをコップと水に例えると下記のようなになる。



やる気満々



やる気なし

やる気が無いように見える人には、コップに何重もの蓋がかかって

いて、やる気が出てくるのを邪魔しているからだ。だとするならば、邪魔している蓋を外せばやる気が出てくるはずである。

中には自分ひとりでこの蓋を外すことができる人もいる。でも、こう言った人は稀で、普通は周囲からのコミュニケーションによって、外されていく。逆を言えば、周囲からのコミュニケーションによって、蓋がされる場合もある。自分自身の体験を振り返れば、思い当たる節はないだろうか。

こう考えたならば、この蓋を如何にして外すかということが、メンバーマネジメントのポイントになると考えることができる。

この外し方にはある種のパターンがある。次回はこのパターンについて述べさせていただきます。

著者ご本人のご希望により、インターネット版ではご覧いただけません。

『一緒に都市おこしをやらないか？』

各務原キムチ都市おこし隊に入ったのは、隊長である星山さんに誘っていただいたのがきっかけです。2007年4月の事でした。

当初は『都市おこし』というものがどんなものなのか、どんなに大変な事なのかをまったく認識しておらず、ただそのスケールの大きな言葉に魅かれるまま隊員となりました。民間と役所の人間が入り混じる会議、様々なイベント、ボランティアとしての立場から見た認定店など、今までに経験をしたことがないことばかりの連続でした。

どの活動でも共通して心に残るのが、『人と人とのつながり』です。今まで何も接点がなかった人でも、各務原市を良くしたいという純粋な思いからたくさんの方々が集まり、意見をぶつけ合い、悩み、協力をし、喜びを共にする。思いを共にした『人間力』ほど力強いものはないと感じます。

本業であるワインショップと花屋とのコラボ商品『ハナサクワイン』も、異業種同士のご縁があり形になったものです。これも人とのつながりなくしてはできないことでした。

都市を造るのも人間、国を造るのも人間、地球環境を造るのも人間。時にはそれを壊してしまう諸刃の剣を持った人間。無限大の可能性がある多くの人間の力を自己利益のためだけではなく、人間や環境の為にシフトすることができれば、もっと素晴らしく楽しい世界になることは間違いありません。星山隊長を中心とした合同会社IICを共に設立したのも、人間の力を信じてより良い環境を造ろうという強い思いがあったからです。IICを通じてどんどんと広がる人間の輪は、本業だけをしていては絶対に手の届かないものばかりです。

人と人が出会い、つながり、そしてまた新たな出会いとつながりが生まれる。今現在つながっている全ての人たちに感謝。そしてこれから出会う人たちにも感謝。感謝の念をいつまでも忘るべからず。

この4月から観光局に異動になった。「富士山を静岡県側から見たいが、宿泊も含めてどこに行けばいいか」「松山から羽田に飛びレンタカーで箱根、伊豆、富士方面に5日間を予定しているけど、富士山には五合目まで車でいけるの？伊豆は静岡県だと思うけど、箱根は静岡県？その辺一帯が分かるロードマップある？」お一由布院観光総合事務所に赴任したとたんそんな電話が多く掛かってきたなあと当時を思い出す。こりゃ一県内に精通しないと駄目だ。休みとあれば県外が多かったが、4月12日に「金谷茶まつり」に出かけた。大井川の右岸、牧の原台地に広がる大茶園を有する銘茶の産地が「金谷」であり、ここで二年に一度開かれるのが「金谷茶まつり」である。JR金谷駅で下車。ここはSLが毎日走る大井川鉄道の始発の駅である。駅から一歩外に出ると、テント張りの下で毛氈を敷いた椅子に和装の女性がお茶の接待をしてくれていた。早速、いっぴく。ありがたく頂戴する。先月奄美大島に「蕎麦サロン」で出向いた折に、知人宅と居酒屋「和美」で玉露と高級煎茶を持参した「急須、湯呑、湯冷まし」でもてなした。茶葉の量、湯温にはかなりうるさいが、意識して出されないお茶に比べればはるかにうまかった。駅前の商店街沿いにもてなしコーナーが4箇所用意され、お茶だけでなく物産市、製茶実演、手もみ茶体験があった。蒸した茶葉を手もみして針状の上質なお茶にするまでには、なんと5時間ほど掛かるとのこと。なるほどこの手もみ茶は25g1,000円だった。人肌ほどの温度でじっくり出してくれたお茶は、茶の緑を感じる奥深いふくよかな味だった。

一方、通りは屋台道中として、各地域の六台の屋台が練り歩く。屋根の上に若者が腰に落下防止の紐を付け、飛び降りんばかりに「もっと曳いて、もっと曳いて」掛け声と提灯を振り祭りを煽る。茶祭りとは毛色が異なる感じだが、これには祭りの変遷がある。昔から一番茶が終わると、お茶を仕事にする人たちが「ほいろあげ」と称する慰労会をやっていた。そもそも焙炉（ほいろ：手もみ用の作業台）の神に新茶を献じる感謝祭が始まりといわれている。きっかけは昭和25年に静岡市で開催された「全国茶業者大会」。「九州でお茶祭りの計画があると聞く、茶どころ静岡が先を越されてなるものか」との声。昭和27年に金谷茶の宣伝・拡販を目的に「金谷茶まつり」として立ち上げる。おっとり気味の静岡人にしては珍しく即断即実行だった。

当時企画したものが、茶摘み衣装の女性達が茶畑に向かう姿を再現した「街道名物・茶娘道中」であり、これが今も祭りの中心となっている。これに「男達の出番も」と昭和62年に屋台を造り「屋台道中」の誕生と相成り、今日に至る。これにより「全町を挙げての祭り」にしたというわけだ。

新茶のシーズンにやればと誰もが思うが、その頃は忙しすぎて祭りどころではない、それが終わってからの慰労の祭りよりも、先取りが好きな日本人の気性にあってか「ほんの走りの新茶」があるこの時期に開かれるようになっていく。

「夏も近づくと八十八夜…あれに見えるは茶摘じゃないか、茜根禪（あかねたすき）に管の笠」の唄声が聞こえてくると茶娘1300人が、普段は人気のない商店街の道路400mを埋め尽くす。1300人もうら若き娘がいるなんてことはないので、元娘もこれか娘も、ようは若いも若きもそろうの茶摘装束で舞う。これはすごい一言に尽きる。

55年前に興したイベントがスタイルを変え、広がっていく。GWにある「浜松祭り」もまさにその類だ。5月末にあるゆふいん文化記録映画祭が10年、劇映画祭、音楽祭、牛喰い絶叫大会も30年を越す。イベントが地域の文化を創り、気質までも変えていく。継続の意味は大きい、今始めても決して遅くはない、何にでもスタートがあり、そこには大いなる目的がある。

